

—平成17年度 中山間地域総合整備事業  
(益美2期地区・落合地区)に伴う発掘調査報告書—

# 平内田遺跡調査報告書

2007年3月

島根県益田市教育委員会

—平成17年度 中山間地域総合整備事業  
(益美2期地区・落合地区) 伴う発掘調査報告書—

# 平内田遺跡調査報告書

2007年3月

島根県益田市教育委員会

# 例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、益田市教育委員会が平成17年度に行つた平成17年度 中山間地域総合整備事業（益美2期地区・落合地区）に伴う、平内田遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	益田市教育委員会			
調査主任	益田市教育委員会 文化振興課 益田市埋蔵文化財匹見調査室			
	渡辺 友千代			
調査員	益田市教育委員会 文化振興課（匹見駐在）主任主事(当時)			
		山本 浩之		
調査補助員	益田市教育委員会 文化振興課 益田市埋蔵文化財匹見調査室		栗田 美文	
調査協力員	益田市埋蔵文化財匹見調査室		大賀 幸恵	
			大谷 真弓	
			上原 弓子	
調査指導員	島根県教育委員会文化財課 山口大学人文学部教授		中村 友博	
調査助言・協力	島根県埋蔵文化財調査センター 益田市教育委員会 文化振興課 主任主事		渡辺 聰	
	益田市教育委員会 文化振興課		松本 美樹	
事務局	益田市教育委員会 教育次長 益田市教育委員会 文化振興課長 益田市教育委員会 文化振興課 文化財係長(当時)		樋口 英行	
			木原 光	
			山本 浩之	
発掘作業員	斎藤 幸夫　　藤井 一美　　田中 莫　　藤井 初義 藤原 剛志　　宮市 勇　　渡辺婦友子　　吉原 延子 大賀 幸恵　　大谷 真弓			
遺物整理員	大賀 幸恵　　大谷 真弓			

3. 調査に際しては、島根県益田農林振興センターの安部主任(平成17年度)をはじめ、島根県益田県土整備事務所の福間主幹(平成18年度)および島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、また山口大学人文学部の中村友博教授など、一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合せて謝意を表したい。
- なお、発掘現場においては、土地所有者の寺尾博進氏を始め、又地元の方々に終始多大な協力を得て、ここに報告することができたことに対してお礼を申し上げたい。
4. 今回の調査において、柱穴遺構－P、土坑状遺構－SKと略号している。なお、現場あるいは編集に掲示した図面は、益田市土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。
5. 出土した遺物または該当関係についての資料は益田市埋蔵文化財匹見調査室で保管している。
6. 編集にあたっては、前掲の調査主任・調査補助員らの協力を得て、執筆・編集は山本が行った。

# 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	(山本 浩之)	1
第1節 発掘調査に至る経緯		1
第2節 発掘調査の経過		1
第2章 調査地区の環境	(山本 浩之)	3
第1節 地形的立地		3
第2節 歴史的立地		4
第3章 調査概要	(山本 浩之)	5
第1節 はじめに		5
第2節 調査区の設定		5
第3節 層序と層位		7
第4節 遺構		9
1. はじめに		9
2. 検出遺構		14
第4章 出土遺物	(山本 浩之)	16
第1節 はじめに		16
第2節 出土・採集遺物のようす		16
第3節 実測遺物		18
1. 繩文遺物		18
2. 弥生・古墳遺物		18
3. 近世遺物		20
第5章 小括	(山本 浩之)	23

## 挿図・図表目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 本調査地点と周辺の遺跡分布図	3
第3図 地形断面図	5
第4図 調査区配置図	6
第5図 配置地区名図	6
第6図 土層堆積状況図	8
第7図 遺構指示および遺物分布図	10~11
第8図 遺構図	12~13
第9図 遺構陥入状況図	14
第10図 縄文土器・弥生土器・土師器類実測図	17
第11図 石器類実測図	19
第12図 陶磁器・鉄器類実測図	21
第1表 遺構計測表	9
第2表 遺物集計表	16

# 図版目次

図版1 鳥瞰する遺跡と周辺部

図版2

1. 南西からみた遺跡の遠景

2. 北東からみた遺跡の近景

3. 南東からみた遺跡の近景

図版3

1. 調査対象地に存在する平内塚（積石）

2. 調査区（トレンチI）設定状況（西から）

3. 発掘作業風景

図版4

1. トレンチI（南西半部）の土層堆積状況  
(北東から)

2. 北西部拡張区の南西壁（東から）

3. 北西端拡張区の北西壁（南から）

図版5

1. 石器剥片の出土状況（南東部拡張区から）

2. 縄文土器の出土状況（北部拡張区から）

3. 縄文土器の出土状況（北西部拡張区から）

図版6

1. 弥生土器の出土状況（北西端拡張区から）  
3. 土師器の出土状況（北西部拡張区から）

2. 土師器の出土状況（北部拡張区から）

図版7

1. PO1の表出状況（南東から）

2. PO2の表出状況（南から）

3. SKO1の表出状況（北西から）

図版8

1. SKO1の半截状況（北西から）

2. PO1の検出状況（南東から）

3. PO2の検出状況（南から）

図版9

1. SKO1の検出状況（南西から）

2. 南西からみた調査区の完掘状況

3. 北東からみた調査区の完掘状況

図版10

1. 石 器 類

2. 縄文土器・弥生土器類

図版11

1. 土 師 器 類

2. 陶磁器・鉄器類

# 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

## 第1節 発掘調査に至る経緯

本遺跡（平内田遺跡）の発掘調査は、平成16年度から始動した益美2期地区（落合地区）県営中山間地域総合整備事業に伴って発生したものである。

よって、平成16年の11月から同年12月にかけては、対象地であった落合地区の平内田・久保・石田といった3地点を選定して試掘調査を実施したものであり、その結果、このうちの平内田地点では数点の弥生土器片、そして1点の打製石斧などが出土したことから遺跡であることが判明したのである〔註1〕。したがって、益田市教育委員会はこの結果をもって、事業主体者である島根県益田農林振興センターに対して、その状況および文化財保護の必要性を報告したのであった。

本事業にかかる協議は、主体者である島根県益田農林振興センター、および受託者側である益田市教育委員会の関係者などが出席して平成16年12月13日に行ったものである。その結果、本事業は翌年度（平成17年度）中には完了予定であるとする主体者側からの要請を受けて、その期間等を考慮した上、平成17年9月から同年10月を目途として現地調査を実施することを了承したのであった。

このことにして、島根県益田農林振興センターからは、平成17年5月19日付けにて埋蔵文化財発掘通知が益田市教育委員会経由で島根県教育委員会教育長宛に提出されており、同教育長からは平成17年6月3日付けの文書をもって通知を示されている。

そして益田市教育委員会は、島根県益田農林振興センターとの本発掘調査



第1図 調査地点位置図

にかかる委託契約を同年6月20日付けをもって締結するとともに、また埋蔵文化財発掘調査の通知を島根県教育委員会教育長宛に同年8月11日付けで送付して、事前の諸手続を終えたのであった。

## 第2節 発掘調査の経過

調査対象地においては、既に表土部分のみの掘削は成されている状況であったが、さらに平成16年度の試掘結果に基づいて層位的に搅乱（後世における埋め戻し）している部分については重機に拋って除去する必要があったため、業者に委託して平成17年8月31日には掘削を実施の上、現地調査はその翌日となる同年9月1日から開始したのである。

調査の進捗にしたがって、頭初の予想以上に礫が多く充填しており、また大型のものも比較的多かったことから、調査は困難を呈している。そして、後世における水田再造成（マチダオシ）および

谷河に拠るオーバーフローなどの影響は下位部にまで及んでいると看取されたのであるが、本報告のとおり、遺物包含層としての5層からは縄文時代から古墳時代に至る約40点の遺物の確認とともに、柱穴状・土坑状の遺構とを合わせて3基ほど検出されたという状況であった。

なお、現地調査は同年10月20日には無事に終了し、平成18年2月6日・7日にはとくに出土遺物からの位置付けについて山口大学の中村友博教授から指導を得るとともに、また地権者である寺尾博進氏をはじめとして、島根県益田農林振興センターの安部正志主任には終始お世話になったことを記し、以上発掘調査に至る経緯と経過の報告としておきたい。

(山 本)

〔註1〕『兜見町内遺跡詳細分布調査報告書XVII』（第47集）益田市教育委員会2005年3月

## 第2章 調査地区の環境

### 第1節 地形的立地

該当地区は、匹見町域の7大字あるうちの落合という1つの大字地区にあたるが、さらに地区内は千原・戸村・道谷下・道谷上・矢尾という字単位ごとに分かれている。そこには小集落が形成されている。そして地区内には、北東—南西方向に流下する落合川や南西—北東方向に流下する戸村川などの支流がほぼ中央城で本流となる匹見川に合流しており、それは蛇行しながらも凡そ東—西方向に流下しているとともに、それに沿って陰陽を結ぶ国道488号線が通貫しているという景観下にある。

その落合地区は、低位部の流域で標高230~280mを測り、また高位部は989.2mの春日山を最高として、大半はこうした山地で占められているが、河川に沿っては狭小な河岸段丘が形成されていて、なかでも本報告する平内田遺跡の所在する道谷下地区は2河川の相会城附近に立地しているのである

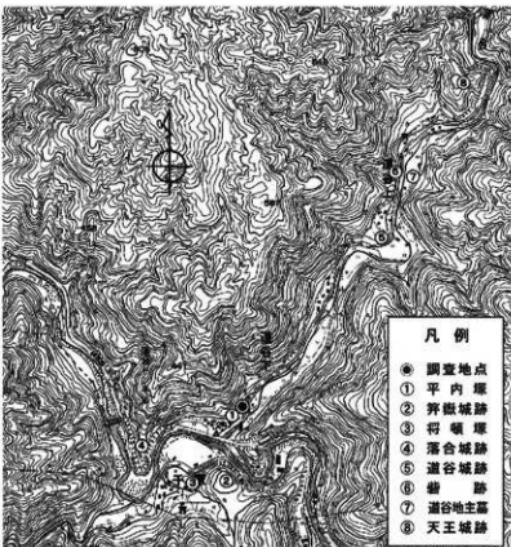
(第2図・図版1・2-1)。

### 第2節 歴史的立地

該地区は、明治22年から昭和30年までは匹見下村の1地区として、農林業を中心とした生活基盤を成して、ワサビ等の栽培にも力をいれていたようである。

そして近世から引き継がれてきた鉛(たたら)事業も流下では盛んであったといわれているが、大正末には途絶えたようで、現今の谷川沿いには鉛跡が数箇所ほど散見できる程度である。また、石田春津著の『石見八重体』(文化・文政頃)には、本町の生業としての木地屋という文字が広見村・道川村・三葛村・七村・道谷村・匹見本郷などにみられるとあり、このことは全国を漂泊する技術集団としてのかれらの往来を想像できるとともに、一方で他地区に劣らぬ良質な森林資源を有していたといえるのではないだろうか。現在、益田市匹見町落合といわれている本地区では、戸数40未満で、おもに農業に従事する人がほとんどであるといわれている。

中世期の遺跡としては、城跡を中心に散見できるようである。伝承によれば、道谷(笛山)城主の



第2図 本調査地点と周辺の遺跡位置図

斎藤源吾は道川城主であった斎藤伯耆守泰家の娘婿であり、天下城主である斎藤右衛門三郎為久とは義兄弟の間柄で、互いに権力を競い合い、そのためか匹見地区には不穏な空気が漂ったようである。また千原の笄嶽城主である斎藤因幡守(将頼)と斎藤源吾とは犬猿の仲で、匹見川を挟んで【落合(茅谷)城は斎藤氏族の城郭といわれている】鳴り合いの喧嘩が絶えなかったといわれ、このような情勢を鑑みた小松尾城主の益田兼任は、斎藤因幡守らに命じて源吾と右衛門三郎為久の一族を急襲させて、ついにはそのほとんどを滅ぼしたといわれている。

その斎藤源吾は道谷地土墓に埋葬されて、また好敵手である斎藤因幡守の墓は特順塚といわれるなどして当時の名残を遺している。このような背景の中で、調査地点脇に存在する平内塚(図版3-1)に目を向けると、由来は不詳ではあるものの、何某かの城主の墓であると伝承されるのも想像に難くないと思える。

なお、原始・古代遺跡と位置付けられるものについては、現時点では確認されていない。これは開発等に伴う発掘調査が過去に実施されていなかったことにも起因していると考えられるが、いずれにしても本地点域は3方向に通じる重要なルート筋にあたっていることからも、ある程度の勢力をもったものにおいては居住していくうえでの好地であった可能性を窺えるものである。

(山 本)

参考文献 矢富熊一郎『石見匹見町史』

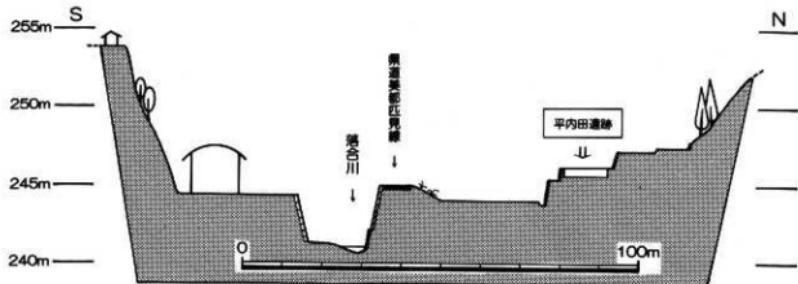
## 第3章 調査概要

### 第1節 はじめに

本遺跡は、島根県益田市匹見町落合イ33番地ほかに所在し、そこの字(あざ)名は五百田といわれている。それをもって遺跡名とも考えたが、同名の遺跡が紙祖地区三葛に存在するため、至近に存在する周知遺跡の平内塚の名称をもって平内田(へいないだ)遺跡と命名することにした(第2図・図版1・3-1)。

該当地は、落合地区のほぼ中央域にあって、落合川の狭小な谷平地が部分的に存在するうちの下流域右岸にあたっており、そこは南西方向約200m地点では本流である匹見川に相会して、比高差約20mを測って立地する。狭小な河岸段丘が左右に発達する本遺跡周辺には、水田や畑地が広がり、その段丘を貫通する一般県道美都匹見線沿いには民家が点在し、数段からなる水田に位置する現地の標高は約243~249mを測っている(第3図・図版2)。

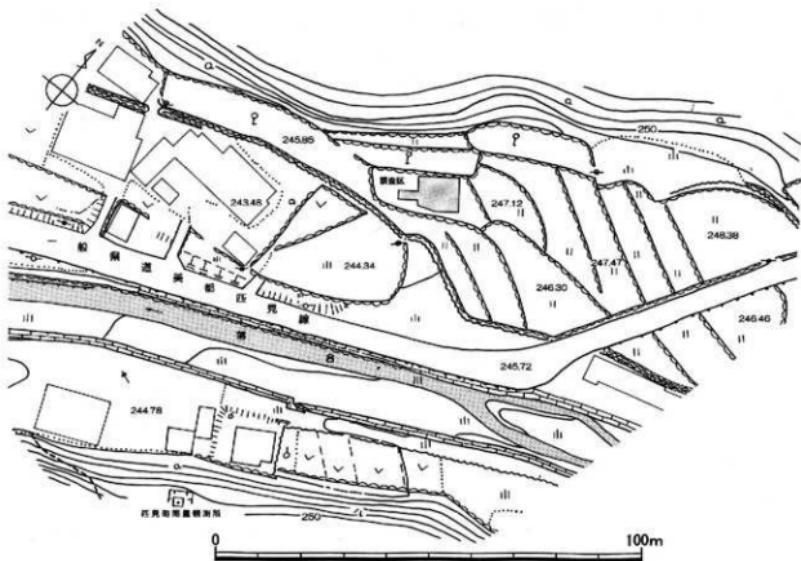
平成16年の11月下旬~12月下旬に行った試掘調査では、段丘のやや高位にあたる山裾側寄りに形成された1筆の水田に、2m×2mの方形区を任意に3箇所設けて調査を行った。このうち地点域のほぼ中央部に設定した調査区(B区)の5層から、繩文期の打製石斧1点・弥生土器片4点・古墳期の土師器片6点などが出土したことによって、本城を中心とした範囲に遺跡が存在すると判断されたのであった。したがって本格調査は、第1章で既述のとおり、その地点域から、さらに近接した下流側のC区側に向かって、後世における明らかな人為層部分を重機による除去のち、その2区を通過する南西~北東方向にトレーニング(以下、トレーニング1と称名)を設けて、その状況を把握することからはじめたのであった(図版3-2)。



第3図 地形断面図

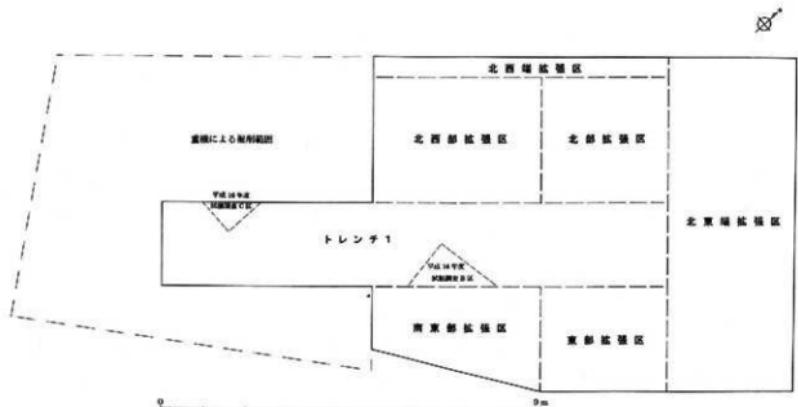
### 第2節 調査区の設定

調査区の設定にあたっては、基本となる基準杭を定めることから始めることにした。その基点は、本対象とする表面標高246.29mを測る1枚の水田(約200m<sup>2</sup>)において、その南西端部に位置する集水溝から側溝(水路溝)の北東方向へ5.5m、そこから直角した南東方向へ4m測った地点に任意に設置したものである(第4図)。



第4図 調査区配置図

そしてその基点をもとに、試掘調査時におけるB区・C区を含むよう考慮して、北東方向へ12m、南西方向へ幅2mを測って長方形形状のトレンチ1をまずは設定したのである。調査の進捗にしたがって、本トレンチの南西半部には過度の攢乱状況が取扱されたことや、また同トレンチ中央部に遺物の出土が確認されたことなどから、平成17年9月16日には、そこに面した北西側に3m×4mの



第5図 配置地区名図

方形区(北西部拡張区)を、南東側に最長2.5m×4mの台形区(南東部拡張区)をそれぞれ拡張区として設定している。

また同年9月22日には、北西部拡張区に隣接する北方向に3m×3mの拡張区(北部拡張区)を増設するとともに、同年9月27日には南東部拡張区に隣接して2.5m×3mの増設区(東部拡張区)を、さらに北西部・北部拡張区に面した山裾側に0.5m×7mの増設区(北西端拡張区)を同年10月5日に設定している。

そして、さらに遺物の点在も鑑みて、同年10月7日には既拡張区に面する北東域に3m×8mの拡張区(北東端拡張区)を増設し、よって最終的には88m<sup>2</sup>の面積をもって調査を終了したのである(第5図)。

### 第3節 層序と層位

本遺跡における基本的層序は、1A層暗灰色土(上位耕作土)、1B層灰色粘質土(下位耕作土)、2A層灰褐色小礫土(上位客土)、2B層黄橙色土(下位客土)、3層暗褐色礫土、4層黒灰色粘質土、5層茶褐色粘質土、6層黒褐色土、7層黄灰色砂礫層の順で堆積していた(第6図・図版4)。

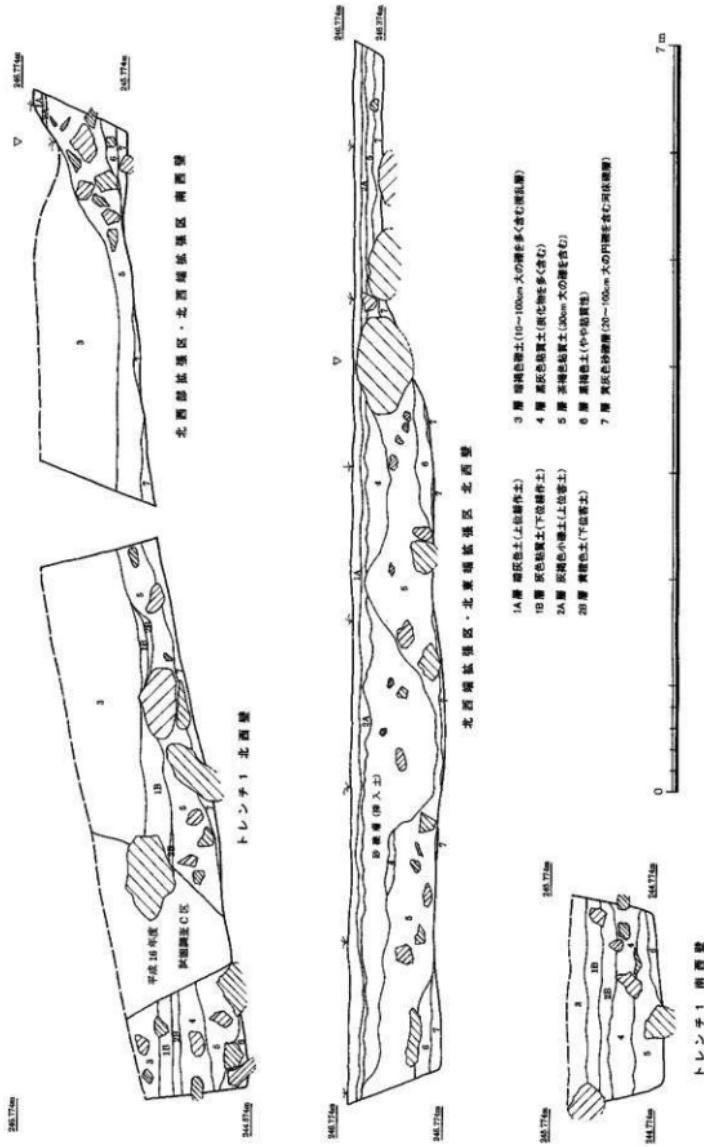
通観すると、調査区の北西から東域にかけては4層以下は尖滅もしくは層薄であり、そして西から南東にかけては層位的に低位となりつつも、やや層厚の状況で堆積していたこのことは、原地形としては高位である北域から低位となる南域方向に緩傾斜して派生していたと捉えられたのである。また1層・2層の分層状況やトレチ1南西半部にみられる旧水田跡(図版4-1の列石)などからは、過去には少なくとも2枚以上の中分田であり、3層の搅乱層を搬入して現行の1枚田を造成(マチダオシ)したことが窺えるもので、それと同時に下位部にむけての深度の高い削平・搅乱等の影響を看取できたのである。

なお、上述の基本的層序以外には、北西端拡張区の北西壁に挿入土としての茶灰色砂礫層が局部的に看取できるが、これは2~5cm大の砂礫が充填していて、おそらくは小谷もしくは旧水路等の氾濫による堆積であると想定している。

以下、基本的層序にしたがい上位から下位へと、その状況をみていくことにする。

そのうちの1層の水田耕作土は上位と下位とに分層されて、それぞれ1A層・1B層と称した。前述のとおり、前者は現行のものと捉えられるもので、層厚は5~10cmを測る暗灰色土であるが、調査開始時にはある程度の掘削が成されていたので、この限りではないといえ、また重機掘削によって調査区南西域にはみられないという状況であった。そして後者は粘質性を帯びた灰色土で、旧水田分として捉えられ、おもに調査区南西域にみられている。層厚は5~20cmを測り、1A層からおよそ1m10cm~1m20cmの下位に確認することができた。

つぎの2層も同様の堆積範囲を示して、水田に伴う客土(床土)としての2A層・2B層とに分層できた。前者は小礫を含む灰褐色土で、層厚3~15cmを測り、そして後者は旧水田に伴う黄橙色土で、層厚3~10cmを測るものであった。また、10~100cm大の礫を多く含む3層の暗褐色土は、調査区南西域にみられる搅乱層である。これは水田再造営(マチダオシ)に伴って搬入されたと捉えられるもので、層厚15cm~90cmを測って厚薄差が激しく、厚く堆積していた(図版4-1~2)。



第6図 土層堆積状況図

なお本層までの層序には、トレンチ1と北西部拡張区を中心として、55点の採集遺物を確認することができた。そのほとんどは国産陶磁器類で占められているが、なかには6点の縄文遺物(打製石斧・石鏃・チャートなど)や1点の古墳遺物(上師器)も混在していたのである(第2表・図版10-1)。

4層は北西域から南域にみられる黒灰色粘質土で、とくに北西側は上位からの削平などによる影響を推察されて、尖滅を呈しながら局部的に通り、その一方でトレンチ1の南西端部では比較的厚い残存状況を呈する。層厚は凡そ30cmまでを測り、おそらくは南西側へと傾斜して接続(堆積)していたと想像されるもので、また炭化物を多く含んで遺物は確認されていない。

そして30cm大の礫を含む5層は、粘質性を帯びた茶褐色土であり、その堆積範囲は凡そ調査区の全域に及ぶと考えられる。北域(上位)の層厚は5~7cmを測って薄く、逆に中城から南域(下位)にかけては最大で70cmを測って厚く堆積することとは、本来の原地形に沿って、北-南方向へと緩傾斜して堆積していたと想定されるとともに、北域の薄層状況は後世における過度の削平の影響を受けたものであると解されたのである。

なお本層は、遺物包含層として位置付けられる。詳細は第4章で述べることとするが、凡そ調査区の北側から南側にかけての中央域で土師器を中心として計39点が出土している。中には、石器剥片・縄文土器・弥生土器も僅かに含むが、それはおそらく上・下層からの攪乱等によるものであると考えられた。また4層との層界面から本層上位面にかけては、柱穴・土坑などの遺構が3基ほど検出されたが、共伴遺物は発見されず、その機能等は不詳である。このことから時期については、おもに遺物の包含状況からみて、弥生期から古墳期にかけての層位であると推定している(第7図・第2表)。

そして6層は北西域とトレンチ1の南西端部に断片的に看取される黒褐色土で、その層厚は最大で15cm前後を測って薄く、やや粘質性を帶びている。上位層との関係から縄文期~弥生期に亘る時期のものとも推測されるが、遺物・遺構とも検出されていないことから明確に断定することはできない。また7層は黄灰色砂礫層であり、20~100cm大の円礫を多く含んで、ほぼ調査区全域に露出する河床疊層として捉えられたのであった(図版9-2~3)。

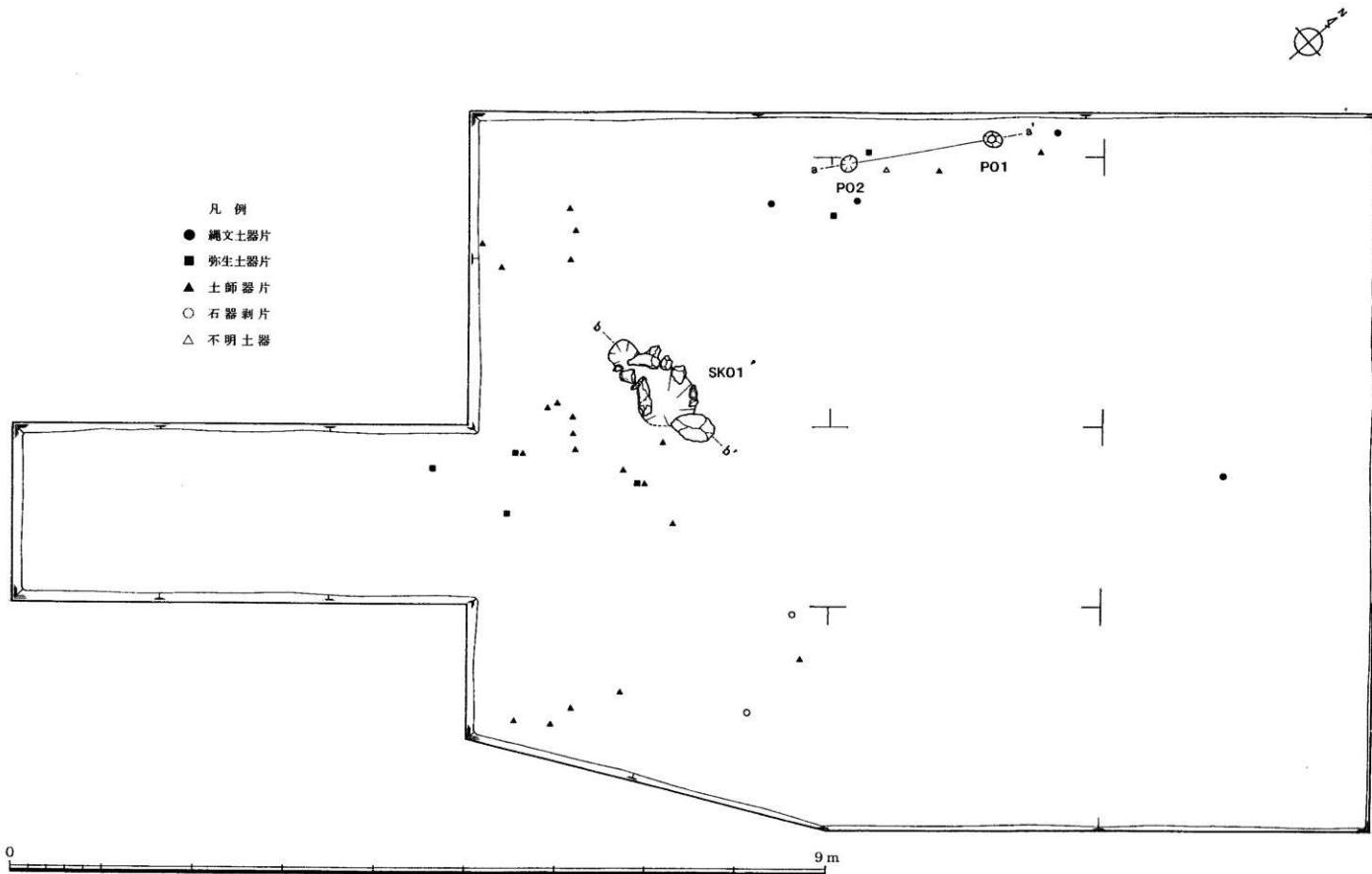
第1表 遺構計測表

遺構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	表面標高 m	炭化物	焼土	摘要
P01	17.0	21.0	25.0	246.374	少 量		共伴遺物なし
P01	16.0	19.0	7.0	246.154	少 量		共伴遺物なし
SK01	29.0	114.0	21.0	246.44	中 量	少 量	共伴遺物なし

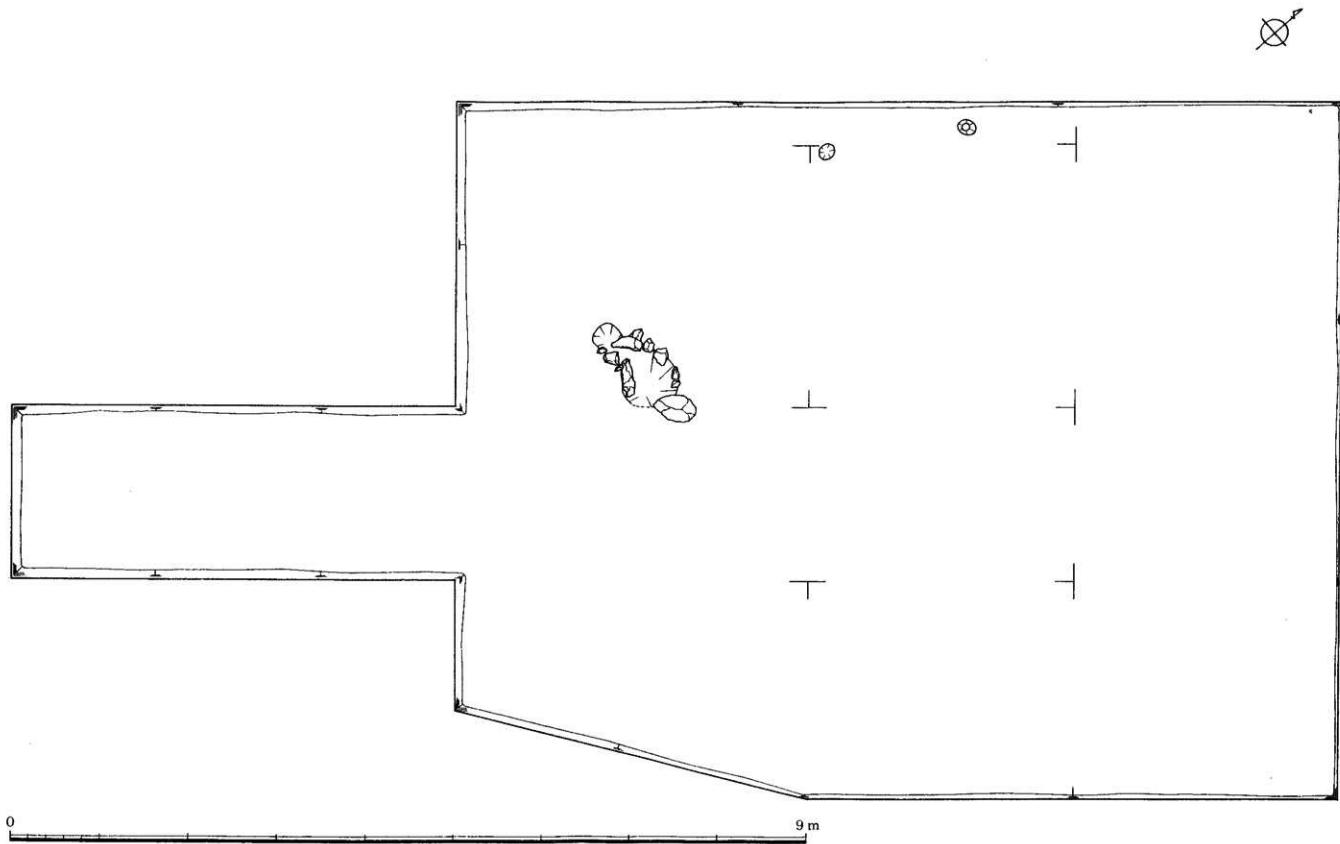
#### 第4節 遺構

##### 1. はじめに

本遺跡では、5層の茶褐色粘質土が遺物・遺構の包含層であったということができる。これらの



第7図 遺構指示および遺物分布図



第8図 造構図

うち遺物においては、多半は土師器を中心とした39点が出土しているが、なかでも縄文・弥生期のものについては、そのほとんどは下位部に集中している傾向を窺えたのであった。

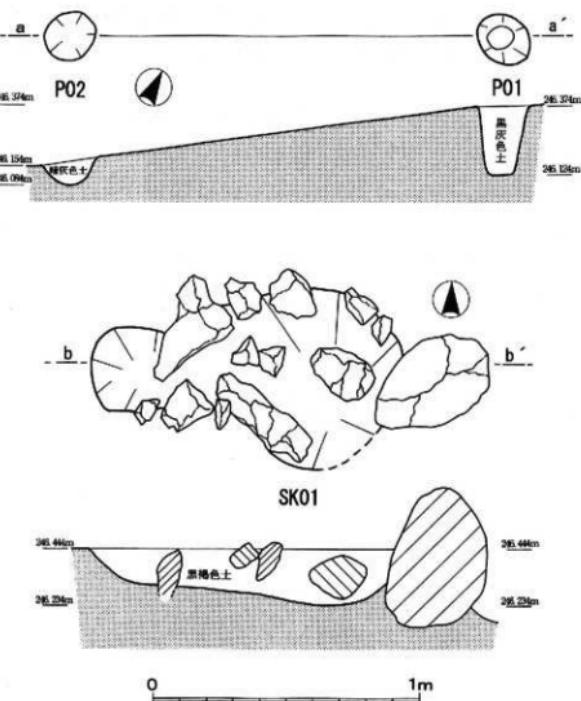
また遺構については、調査区の中央域から北西域にかけて3基ほど検出されたものであるが、いずれも4層との層界面から本層上位面にかけて確認されて遺物は共伴せず、そして炭化物を含む暗灰色～黒褐色土を陥入するものであった。その大半の坑壁は不明瞭で、包含層との色調差にも乏しく、また概ね坑底部と捉えられることから、その上位部は判然としなかったのである。

したがって、構築層位およびその時期、さらに機能的性格について不詳のものがほとんどであるといえるが、またその形状から柱穴状のものをP、土坑状のものをSKと略号することとして、以下していくこととする（第7図・9図・図版7）。

## 2. 検出遺構

ピット(P)と略称するものは、調査区北西域の北西端拡張区およびその周間に2穴検出された（第7図・第1表・図版7-1～2・8-2～3）。これは上流側からP01、P02とそれぞれ呼称することとし、いずれも5層の上位面に確認されて径20cm前後を測るものであった（第8図・第1表）。

そのうちのP01は、長径21.0cm、短径17.0cm、深さ25.0cmを測り、その坑形は台形状を呈して共伴遺物



第9図 遺構陥入状況図

は検出されないものである。また表面標高は246.374mを測って、その陥入土は炭化物を少量含んだやや柔質な黒灰色土であり、包含層との明確な色調差を認められるものであった。それは上位層

である4層黒灰色粘質土からの陥入土質と扱えられるものであることから、その構築部位は本来は4層に位置するものであると想定される。

またP02は表出面標高246.154mを測り、本遺構中もっとも下位に検出されたもので、それは長径19.0cm、短径16.0cmを測ってP01とほぼ同口径を呈している。炭化物も少量で遺物も伴わないことはP01と同様であるが、その深さは7.0cmを測って浅く、擂鉢状の坑形を呈している。このことは、その部辺に深く挿入される茶灰色砂礫層の削平等に関わるものと想定されるとともに、坑壁は不明瞭で色調差に乏しく、またその陥入土は暗灰色土を呈することからも、4層に構築された可能性も窺えるが断定はできない。

これらは1間(約1.8m)の間隔を測って、おそらくは掘立柱跡と想定できるものであるが、調査区南西端部には上位水田および水路等の造成時に破壊されたと考えられて他の痕跡はないことから、その建物の規模等は判然とはせず、機能的性格は不詳であった。また、過度の削平等による影響も考慮して、その構築層を4層として仮定するならば、構築時期は弥生期～古墳期として推定できるが、その確証はない。

つぎにSK(土坑)と略称するものは、調査区中央域の北西部拡張区に1坑が検出された(第7図・8図・第1表・図版7-2・8-1・9-1)。単独であるがSK01と称名することとし、その表出面標高は246.444mを測って、本遺構中もっとも上位に検出されたものである。表山時には礫が充填して包含層との色調差も乏しく、検出も困難を呈した。

それは長径114.0cm、短径29.0cm、深さは最深部で21.0cmを測って不整形を呈し、中量の炭化物や少量の焼土を含んだ黒褐色土が陥入していた。また、坑壁は貧弱で共伴遺物もなく、炉や墓などの性格も想定してはみたが、その機能的用途は不詳である。

本遺構は4層と5層との層界面に検出されたもので、その陥入土質の傾向や過度の削平状況などから勘案して、Pと同様に4層中において構築されたと仮定するのであれば、その時期は弥生期～古墳期にかけてのものとして想定はされるものの、断言はできないのである。

(iii) 本

# 第4章 出土遺物

## 第1節 はじめに

後世の人為層ともいえる1～3層については、地区名や層位を記しただけの採集のみといった方法で行ったが、それ以外については総てが5層の茶褐色粘質土から出土していて、その出土標高を実測するなどの原位置方式で行った。ただし中には層序の読み違いのものも若干あると思われるが、現地調査時に捉えたそのままを集計したものであって、そして後述の見解などは、これを基本資料として捉えたものであることを最初に断っておきたいと思う（第7図・第2表）。

また、本遺跡からは94点のものが出土・採集されているが、ほかに炭化物については、おもに4層に微細なものが中量から多量の幅をもって散見され、また焼土はほとんど確認されず、本報告をもって第2表には掲載していない。

## 第2節 出土・採集遺物のようす

本遺跡で最も多く出土したのが陶磁器類の44点、そして土器類の38点、石器類の8点、その他ガラスなどの3点、鉄器類の1点とつづき、大別すれば上器・石器類と陶磁器類とに分類される（第2表）。

第2表 遺物集計表

出 土 区	層 名	石 器 類		土 器 類		陶 磁 器		其 它		計			
		打削石斧片	石 破	チャート	石器剥片	绳文土器	弥生土器	土器附	不规则土器	陶器附器	铁器	角 钉	ガラスなど
トレンチ I (北東部)	1A・2A層									2	3		5
	2A層		1						3	1	1		3
	3 層								8	7			15
トレンチ I (西南部)	1B・2B層								1				1
	5 层			1				4	10				3
北西部拡張区	1A・2A層									5	1		6
	3 层	1								1	1	2	5
	5層下迄剖面					3	9						10
1A・2A層										1	1		2
南東部拡張区	5 层					1							1
	5層下迄剖面					1							2
東部拡張区	1A・2A層									1			1
北部拡張区	1A・2A層	1								1	2		4
	5 层							1	1				1
北西部拡張区	1A・2A層							1	1				3
	5層下迄剖面							1	1				2
1A・2A層										3	1		4
北東端拡張区	1A・2A層	2						1	1				3
	5 层							1	1				2
	2A・3B層									1	1		1
	5 层							1	1				2
	計	4	1	1	1	2	4	6	21	1	25	19	34

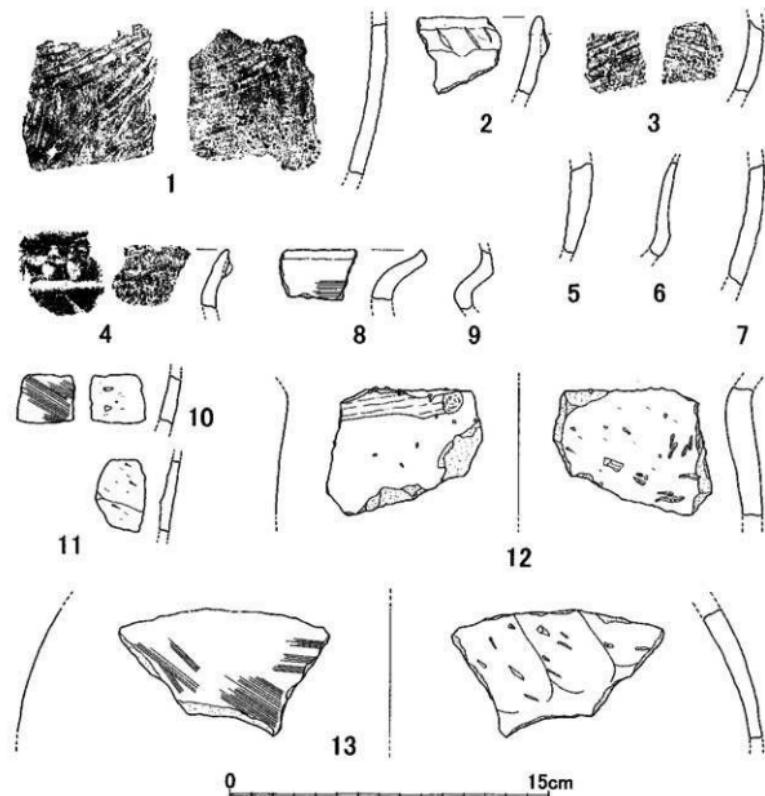
さらに上器類は繩文土器4点、弥生土器6点、十土器27点などに、また石器類は打製石斧4点、石鏽1点、チャート1点、石器剥片2点に細分されて、そのほとんどは5層の茶褐色粘質土に検出されたものであるが、石器類の大半は1～3層からの採集という状況であった。その一方、陶磁器類はその総てが国産のものであり、鉄器の角釘やガラスも含めて、1～3層までに確認された搬入物として捉えられたのである。

遺物総数94点のうち、1～3層からは55点、5層からは39点という統計を示すが、ここでその分布状況を地区別に順にみていくと、トレンチIの40点(42.6%)、北西部拡張区21点(22.3%)、南東部拡張区9点(9.6%)、北部拡張区8点(8.5%)、北東端拡張区8点(8.5%)、北西端拡張区7点(7.4%)、

東部拡張区1点(1.1%)へとつづき、トレンチ1と北西部拡張区からの出土率の高さを窺うことができる。

また5層出土分のみに着目すると、トレンチ1の14点(35.9%)、北西部拡張区10点(25.6%)、南東部拡張区7点(17.9%)、北部拡張区4点(10.3%)、北西端拡張区3点(7.7%)、北東端拡張区1点(2.6%)となって、上記と同様の結果を示すこととなっているが、第3章での報告のとおり、土器類においては縄文期から古墳期までの時代幅のあるものが混在して確認されていて、このことは高い深度による削平等の影響により、本層上・下層において搅乱的様相を呈した結果であると思われるるのである。

したがって、本稿においては遺跡を特徴づけるものとして特に土器・石器類を中心に捉えることとし、また採集物の陶磁器類においても特徴的なものを挙げて、以下みていくこととする。



第10図 縄文土器・弥生土器・土師器類実測図

### 第3節 実測遺物

#### 1. 縄文遺物(図版10)

縄文土器(第10図・図版5-2~-3) 本調査では4点の縄文土器が出土していて、その多半は5層下位部からのものであった。その1はもっとも大片のもので、内外面ともに条痕調整が施されている胴部片で北西端拡張区からのもの。胎土は2~3mm大の砂粒を含んで密であり、色調は暗褐色を呈して、その焼成は良好である。2は北西部拡張区からのもので、口縁部に貼付けられた刻目突帯部をもつ突帯文土器。その刻目は斜度をもって細く刻まれていて、内面はナデ調整が施され、胎土は1~2mm大の砂粒を含んで密であり、色調は明褐色を呈するものであった。

そして3は1と同様の特徴をもつが、北東端拡張区からの出土で外面に条痕調整の顕著な小片のもの。また北部拡張区に出土した4は2と同様の突帯文土器であるが、その刻目は較べて円みを帯びて垂直方向に施されるものであった。そのいづれも縄文後期から晩期にかけてのものと想定される。

石 器(第11図・図版5-1) 1から4はいづれも表面採取による打製石斧片で撥形を呈するものであり、このうち1・2は凝灰岩系の石材で、3・4は安山岩質のものである。1は損壊しているものの、その両面の側縁部に剥離を施して成形されたもので、荒い調整のうちに細かな部分調整もみられて、完品であれば大型品と想定されるもの。2も1と同様な調整を施すものであるが、背面に顕著で、上部からの打撃調整を窺えるもの。また3は自然剥離を利用したと考えられるもので、背面に自然面を遺し、両面とも剥離調整がみられて、とくに下部に顕著である。そして4は、両面に丁寧な調整が施されて成形された秀品であり、磨製石斧の未完成品とも想像でき、風化の進んだ青灰色の色調を呈するものである。

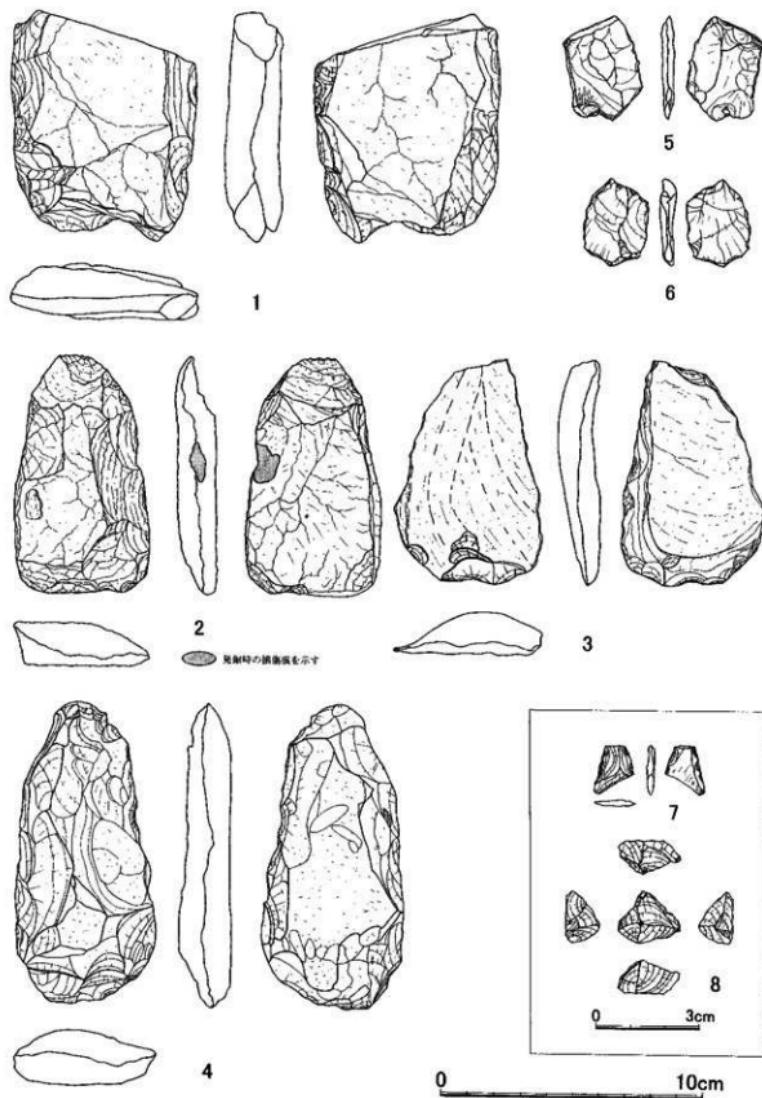
5から7はいづれも安山岩質であり、そのうちの5・6は南東部拡張区の5層からの出土品で両面とも荒い調整を施された薄い剥片であり、黒灰色を呈する。また7は表面採取されたもので、その両面の刃部には細かな調整がみられて、尖頭部および片足部は欠損し、石鎌の未製品と想定されるものである。同様の採取品である8は、淡緑青色を呈したチャート片であり、細かいリングを伴う小片である。

#### 2. 弥生・古墳遺物(図版10・11)

弥生土器(第10図・図版6-1) 5から7は弥生土器で、8は不明土器としているが弥生土器の可能性の高いもの。そのうちの5・6はトレンチ1の5層から出土したもので、胎土は1~3mm大の砂粒を含んで密であり、色調は橙灰色を呈している。两者とも内外面にはナデ調整が施されているが、うち前者は加えて内面に箒削りも顕著で、おそらくは甕の肩部と想定できるものであり、また後者は頸部界に稜を有した壺状のもので口縁部はやや外反し、その形状から後期と想定できるものである。

そして7は北西端拡張区の5層下位部からのもので、内外面にはナデ調整が施されて、また内面には箒削りも顕著である。おそらくは甕などの胴部片と思われて内外面には炭化物が付着する。また8は北部拡張区の5層下位部から出土したもので、胎土は1~3mm大の砂粒を含んで緻密であり、色調は橙灰色を呈している。内外面とも丁寧なナデ調整が施されて、その内面下部の横方向には十

数条の細線がみられており、壺類の口縁部分と思われるもの。



第11図 石器類実測図

**土師器**（第10図・図版6～2～3）9から13は、いずれも胎土は緻密で良好な焼成を示し、また色調は橙灰色～橙褐色を呈する土師器と考えられるもので、そのうちの9はトレーナーの5層から出土しており、また11は南東部拡張区の5層下位部から、そしてそれ以外は北西部拡張区の5層下位部からのものである。

内外面に丁寧なナデ調整が施される9は、逆S字状に屈曲した壺類の口縁部と想定されるもので、外面には明確な稜を有して、口唇部は欠損している。また10・11も内外面に丁寧なナデ調整が施されて器胎は薄く、おそらくは壺か皿の類であろうと思われる。その前者は外面にナデ調整による細かい条線が顕著で炭化物を付着し、また後者は内面に箒削りが顕著で1条の稜線を有している。

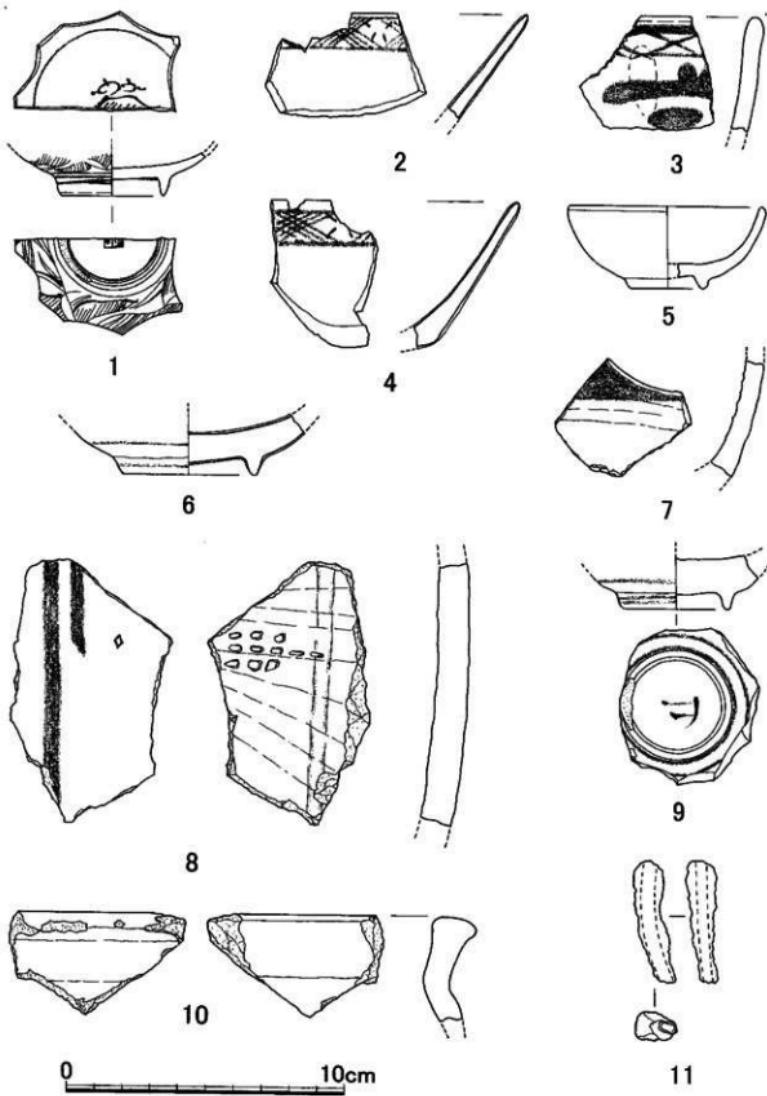
そして12も内外面にナデ調整が施されていて、内面は箒削りで調整されるもの。その形状からおそらくは壺と判断されて、緩やかに屈曲する頸部外面には指頭によるナデ調整痕が顕著である。また13は検出された土師器のなかでは、もっとも大型片となるもので、壺の肩部(胴上半部)と想定されて、器胎は下方に向かって薄くなる。外面はナデ調整による細かい条線が顕著で炭化物を付着し、また内面には箒削りによる2・3条の稜線を有して、その痕跡は顕著である。

### 3. 近世遺物(図版11)

**国産陶磁器**（第12図）1から10は国産の陶磁器で、すべてが1層から3層までに出土した機人物と捉えられることから、出土地点については明記しないこととした。そのうち1は碗と思われる磁器の底部で、胎土は緻密で灰白色を呈し、内外ともに染付がみられている。おそらくは19世紀頃のものだろう。2は碗の口縁部で、口径約8.8cmと想定され、胎土は緻密で灰白色を呈している。その内面は呉須による染付文様がみられるとともに、外面には淡緑色の青磁釉が薄く施されている。釉面には貫入および細かい気泡がみられて、おそらくは18世紀頃の肥前系のものだろう。また3はやや厚みをもった碗の口縁部で、胎土は密で灰色を呈する陶器である。外面には呉須による染付文様がみられて、おそらくは18世紀頃の肥前系のもの。

4は2と同様の特徴を有するもので、外面下部には屈折する稜線がみられている。また5は口径約8.0cmを測る小壺で、胎土は黄灰白色を呈して密である。内外とも施釉されて、その釉調は乳白色を呈する。6は碗の底部で、胎土は密で灰色を呈する陶胎染付のもの。器胎は厚く、また外面には濃い呉須による2線が描かれて、おそらくは18世紀頃の肥前系窯のものであろう。7の胎土は橙灰色を呈して緻密であり、また施釉は外面のみで、上位部の白濁色を呈する釉調に対して、下位は乳白色を呈し、おそらくは2度焼きによるものかと想定される。内面には成形時における数条の稜がみられるが、その器種については瓶や徳利の類とも考えられて不詳であり、おそらくは肥前系のものと思われる。

また8は大壺の胴部片で、胎土は密で茶褐色を呈する陶器である。内外とも釉垂れ(かけ流し)痕がみられて、また内面には横方向への成形痕とともに叩き目も遺って、おそらくは19世紀頃のものだろう。9は碗と思われる磁器の底部で、胎土は緻密で灰色を呈し、内外ともに施釉されて、その釉調は淡青色である。外面の高台脇には2・3条の染付線が描かれているとともに、また高台内部にはおそらくは水草をデフォルメした模様を呉須によって描かれている。18世紀頃のものだろう。



第12図 陶磁器・鉄器類実測図

そして10は甕の口縁部で、内側にやや屈曲する形状を呈する陶器である。胎土は密で橙灰色であり、

釉調は斑で白濁色を呈する。その釉面は強い光沢をもち、おそらくは地元窯(石見焼)産のものと考えられる。

**鉄 器** (第12図) 本品も採集品で搬入物と捉えられて、その形状から角釘類と想定されるもの。それは腐食の激しい鉄製品であり、質量は4.1gを量って、赤褐色を呈した酸化鉄が全身に付着するものであった。

(山 本)

## 第5章 小括

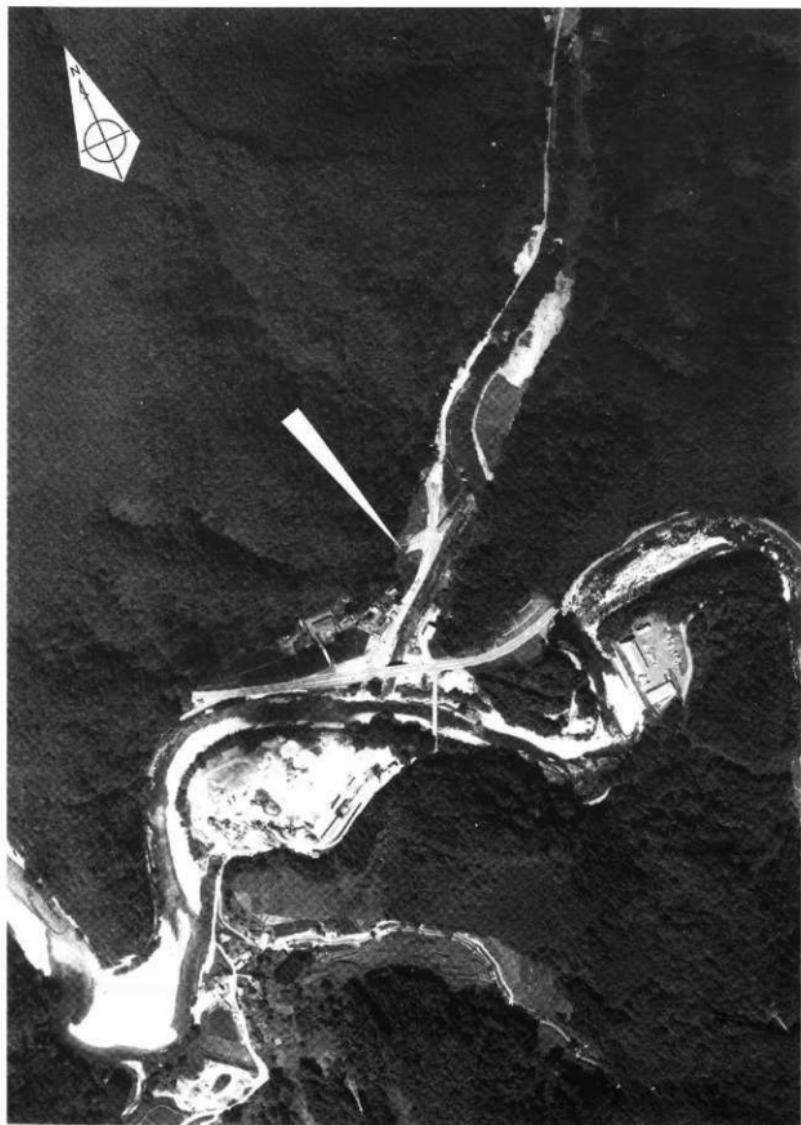
本遺跡においては、後世における水田再造成(マチダオシ)および谷河に據るオーバーフローなどの影響は下位部にまで及んでいると看取されたものであり、また地形的には調査区の北域から南域にかけて、緩傾斜をもって緩やかに派生していた状況を窺うことができたのである。

そのことにも起因するのであろうか、搬入層としての1層から3層までは50数点の近世期遺物が採集されたとともに、遺物包含層としての5層からは縄文時代から古墳時代に至る約40点の遺物が混在して確認されており、また同層上位面からは柱穴状・土坑状の遺構が合わせて3基ほど検出されたということは本報告のとおりである。

したがって、その遺跡の存在時期については、甚だ微弱ではあるが上記の検出状況などを考慮して、概ね縄文期から古墳期という時代幅をもった時期を想定している。

なお本地点域の周辺には、中世期より前の遺跡については現時点では確認されてなく、またそのことは開発行為等に伴う埋蔵文化財の発掘調査が行われなかつたことにも起因すると考えられたことは第2章で述べたとおりである。いずれにしても、本遺跡には該当期における遺物・遺構などが検出されたことは事実であり、そのことは小規模ではあるけれども小集落が形成されていたと捉えられるとともに、またその周辺域においても、該当期における遺跡の存在を示す可能性の一端を窺えるものと思えるのである。

(山 本)



鳥蹤する遺跡と周辺部

図版2



1. 南西からみた遺跡の近景



2. 北東からみた遺跡の近景



3. 南東からみた遺跡の近景



1. 調査対象地に存在する平内塙（石積）



2. 調査区（トレンチ I）設定状況（西から）



3. 発掘作業風景

図版 4



1. トレンチ I (南西半部) の土層堆積状況 (北東から)



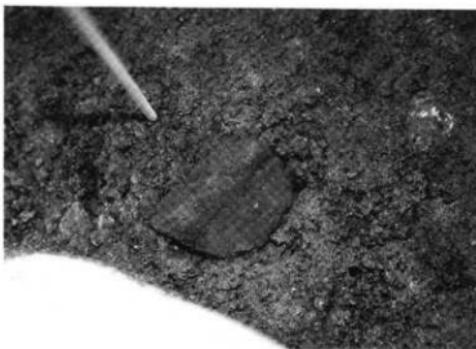
2. 北西部拡張区の南西壁 (東から)



3. 北西端拡張区の北西壁 (南から)



1. 石器剥片の出土状況（南東部拡張区から）



2. 縄文土器の出土状況（北部拡張区から）



3. 縄文土器の出土状況（北西部拡張区から）

図版 6



1. 弥生土器の出土状況（北西部拡張区から）



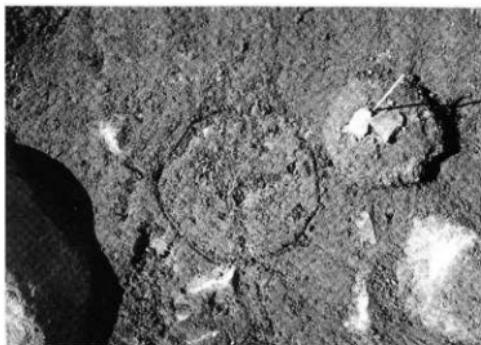
2. 土師器の出土状況（北部拡張区から）



3. 土師器の出土状況（北西部拡張区から）



1. P01の表出状況（南東から）



2. P02の表出状況（南から）

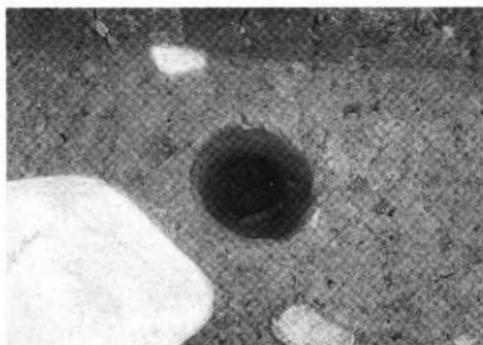


3. SK01の表出状況（北西から）

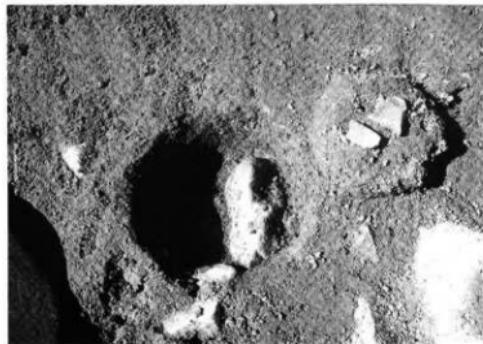
図版 8



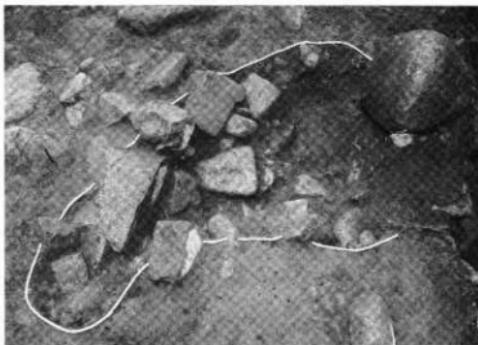
1. SK01の半截状況（北西から）



2. P01の検出状況（南東から）



3. P02の検出状況（南から）



1. SK01の検出状況（南西から）

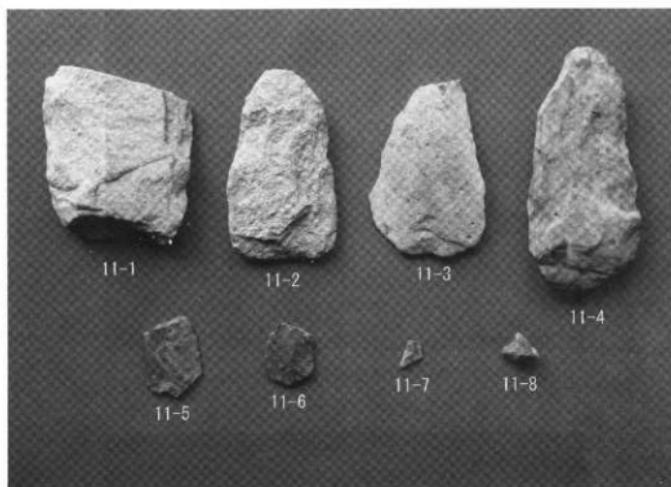


2. 南西からみた調査区の完掘状況

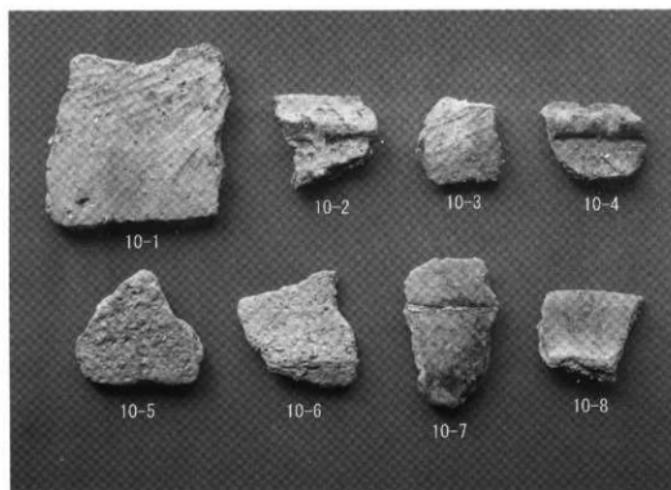


3. 北東からみた調査区の完掘状況

图版10

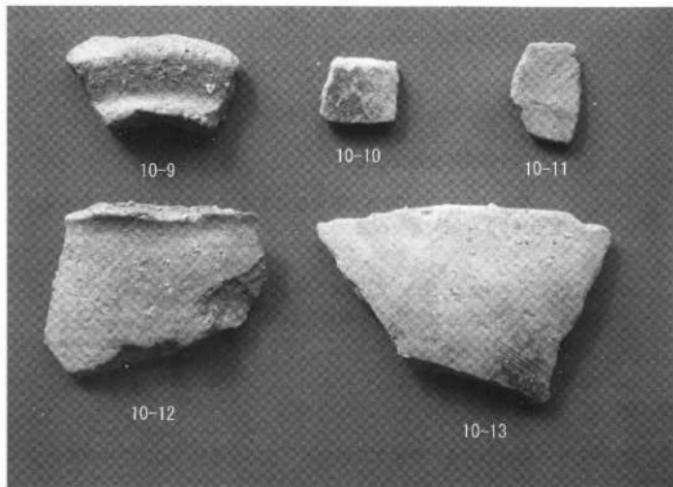


1. 石 器 類

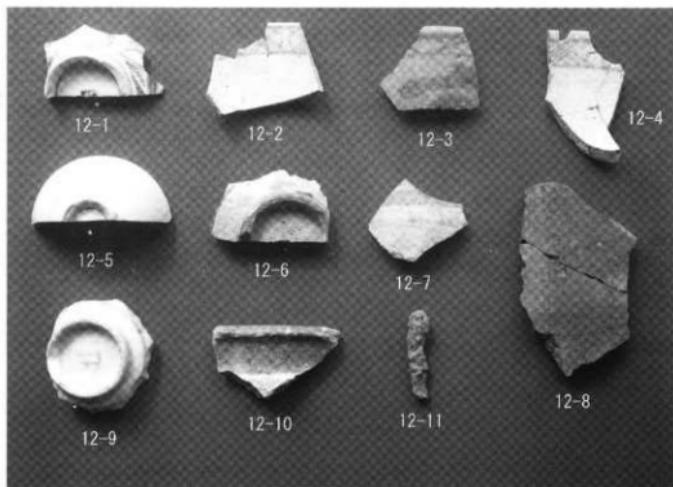


2. 縄文土器・弥生土器類

圖版11



1. 土 師 器 類



2. 陶 磁 器 · 鐵 器 類

# 報告書抄録

ふりがな	へいないだいせきちょうさほうこくしょ						
書名	平内田遺跡調査報告書						
副書名	平成17年度 中山間地域総合整備事業（益美2期地区・落合地区） に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	益田市匹見町埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第51集						
編著者名	山本浩之						
編集機関	益田市教育委員会文化振興課（益田市埋蔵文化財匹見調査室）						
編集機関の所在地	〒698-0033 島根県益田市元町11番15号 (〒698-1211 島根県益田市匹見町四見(1233-1))						
発行年月日	西暦 2007年3月20日						
遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査 面積m <sup>2</sup>	調査期間	調査 原因
平内田 遺跡	しまねけんめいすだし 島根県益田市 匹見町落合	32204	34度 34分 52秒	131度 0分 29秒	88m <sup>2</sup>	2005.09.01 ～ 2006.10.20	ほ揚 整備
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
(小)集落	縄文時代～古墳時代	柱穴 土坑	石器 縄文土器 弥生土器 上師器 鉄器 国産陶磁器				

---

平成19年3月8日 印刷  
平成19年3月20日 発行

**益田市匹見町埋蔵文化財調査報告第51集**

—平成17年度 中山間地域総合整備事業  
(益美2期地区・落合地区)に伴う発掘調査報告書—

**平内田遺跡調査報告書**

発行 益田市教育委員会  
島根県益田市元町11番15号  
印刷 西村印刷所  
島根県益田市高津六丁目27番8号

---